

エコロジーと環境教育

教育学 北川 章子

本小論は、現代における環境問題の認識の広がり、そこで環境問題克服のための方策としてとらえられる教育の方向つまり環境教育について論じ、その可能性と問題点について明らかにしようとするものである。環境問題の意識を支える考え方として、エコロジーとよばれることばは重要な意味をもっている。エコロジーということばはそれをつくり、信奉または支持する人びとにとって様々なニュアンスをかもしだし、時代によってその意味を変化させつつ今日にいたっている。そこで、そのエコロジーということばそのものの持つ意味の諸相を明らかにしつつ、その中での積極的活動部分である政治・教育といった分野での意味を考察するものである。

第一章 エコロジーの意味

第一章では、まず規範的意味でのエコロジーについての試論をおこなう。エコロジーということばの意味を広義に解釈し、エコロジーの現在の意味または思想的意味を問うものである。

そこで、はじめにその定義づけのための要素として現代の環境問題と開発の概念を規定する、サステイナブル・デベロップメント（「持続可能な開発」）という考え方の意味を探る。サステイナブル・デベロップメントということばには、近代化の限界を環境問題に見、乱開発、人類の発展の限界をもった人間に利用される自然のすがた、およびそれに対応する人間の対応の仕方の規範的意味が込められている。このような開発つまり人間と自然との積極的な関わりかたの一つについての保留を行っている言葉には、自然を人間が生きるための搾取する対象であるとか、人間の都合に合わせて限りなく便利さを

追求できる自由自在の道具を提供してくれるものという暗黙の認識を否定する意味がある。そこでは自然に対する開発を行う際にはまず科学的計測により、それが望ましいかどうかを推し量った上でなければ手を加えることができないであるとか、可能な限り環境的危機を回避するための科学技術発展の在り方を追求するという、環境倫理的規制力の強い価値観が期待されているのである。これは、過去の科学発展の歴史または近代化の歴史と自然との関係を規定することによって、観念的にはあるが、思想的位置付けができると考えられる。このように現在のエコロジーには元々の生物学的科学の一分野としての意味以外に人間の行動や思想を規定する意味も介在しているのである。

しかし、エコロジーの内部的要素として、環境全体を見渡したとき、そこでのプライオリティを何が握っているのかが問題となってくる。人間か環境か？という奇妙な疑問が沸いてくるのである。自然との一体化を図ることこそ本来のエコロジーの考察の仕方であるとするディープ・エコロジーの考え方は確かに、上記のように、人間の行動や思想を規定する意味をエコロジーが明確にもっているという点で、エコロジーの規範的意味を表現しているといえるが、その発想の閉塞性ゆえに普遍的価値として受け止められることには矛盾を生まざるを得ないと考えられる。本論が最終的にエコロジーの教育的意味を考えるという点からもディープ・エコロジー的な発想でエコロジーをとらえることは望ましくない。なぜなら環境教育が責任を負うところは将来の環境に産み落とされる次世代を担う人びと（子どもたち）であって、あたかも環

境に主体が置かれたかのように教育を行うという言い方にエコロジー的偽善または詭弁ともいうべき誤謬をとまなうからである。以上のように現在段階でのエコロジーの規範的意味を限定のうえに、以下の章をつづけるものである。

第二章 エコロジーの形成過程

エコロジーの起源を探ることはエコロジーの諸相を知ることである。エコロジーを中心に歴史を掘り下げることはエコロジーを中心に据えた構造によって時代諸相を並べ変えることにしかすぎない。そのように考えることから、この章は、エコロジーの歴史を描くために設けられたものではあるが、“エコロジー史”とはせず、“エコロジーの形成過程”としたものである。エコロジーの多義性ゆえに、それらの思想的形成過程は一見ばらばらのようにみえる。実際エコロジーを指向した人びとの行動範囲、ジャンルには何ら接点のないこともある。しかし、エルンスト・ヘッケルの造語によるエコロジーということばが、様々の意味を巻き込むかたちで現在存在しているいま、これらの過去の諸相を知することは、現在のエコロジーの規範的意味を知るうえで重要な手掛かりとなる。そこでエコロジーの多義性の分析をする意味で便宜的にエコロジーの形成過程を3つの分野に分けて述べたものである。

その中で、現在にもっとも近く、明確にインパクトをもっている動きとして、イデオロギーとしてのエコロジーを見いだすことができる。社会的ニーズとエコロジーの接点という意味でこの1970年代を中心とする動きは非常に興味深い。そこでの主張と主張者らの個人的動機を画一化して、述べることは難しいが、その主張の中にはエコロジー的社会的模索という傾向が見られるのは確かである。その一方で、このような急進的・超現実的エコロジー的社会的指向という要素は、近代教育のニーズとは相入れない、または、ずれたものとして存在していた。

しかし、このようなエコロジーのアウトサイダー的要素が、ようやく現在の環境教育のなかで、実効性をもつものとして働いているように見受けられるものである。

第三章 環境教育理論

イデオロギーとしてのエコロジーの受容には、その急進的・超現実的性格のゆえに保留が付けられるのに対して、環境問題の必然として持ち出される環境教育は国際会議での定義づけのために非常に広範に受け止められつつある。第三章には環境教育の価値観を主に環境教育に関する国際会議から考えるものである。

1972年のストックホルム国連人間環境会議において「環境教育の目的は、自己を取り巻く環境を自己のできる範囲内で管理し、規制する行動を一步ずつ確実にすることのできる人間を育成することにある」とされ、教育の環境問題への態度を明らかにしたことさらに、1975年の「ベオグラード憲章」は環境教育という行動にとって規範的意味をもっている。そこには環境教育を行う態度の段階的分析があり、環境教育の基本的要素が示されている。しかし、その反面そこにはエコロジーの提案の理想化はあるが、実効性のための規制はない。政治的・経済的利害の不一致という国際問題を考えて、汎世界的にこのような環境教育が簡単に受け入れられるとはいえない。たしかに国連の先進国を中心とした開発計画においては、国の経済的利潤を“豊かさ”として受け止めるのではなく、個人にとっての“豊かさ”とは何かに着目した指標IDIなども考えられているが、そこにはやはり近代化を前提にした人間の“豊かさ”の観点があることには違いない。このような国連主導または国家主導での環境教育の規範化には人間の価値の普遍化の代償として、実効性を欠落させた理想的価値にとどまってしまう恐れが大きく、近代化を前提とした先進国の価値観の押し付けに留まることが多いのである。

第四章 エコロジーと環境教育

第四章では環境教育理論の沿革部分、社会的受容といったことがらについて、またそこで模索されるエコロジー的価値とはどのようなものかについてのべる。

第三章でみたような環境教育の定義づけの背景には環境問題を文明的危機として受け止める近代化世界（モダン）からの批判がある。その中には産業の開発や発展、人間の進歩が近代化のための課題であったならば、近代化の限界を克服することがポスト・モダン世界への課題であるとする考えがある。エコロジーはこのような思想の中に位置付けられるのであるが、そのエコロジーから醸し出される近代人の自然観にはすでに、人間の都合に良いように変容させられたかたちでしか理解できない自然の意味範疇が出来ているという指摘があるのである。現在環境問題が存在するというエコロジー的理性は存在するが、エコロジー的倫理観またはエコロジー的道德とは無関係のままである、とする指摘は現代における自然観をどう捉えるべきかという問いにつながっている。この問題が教育につながった場合、エコロジカル・リテラシーの必要性といったようなエコロジー的教育の知識とはなにかという疑問、近代教育の価値基盤を

問う問題があるのである。

第五章（結論）エコロジー的教育

1970年代にその運動の興隆をみた社会運動者の思想の担っていたエコロジーと、環境問題の認識の広がりに基づくエコロジー的価値の社会的ニーズは環境教育の概念構築によって接点を得ているといえる。第三章の環境教育理論の基本的性格や目的にみるように、その方法・思想基盤は学校を中心とした伝統的近代教育の枠組に収まらず、環境教育の促進のためには教育価値受容のための新たな基盤を作る必要があることが分かる。つまり、環境教育の理論はエコロジー的価値の社会的拡大によって、ようやく教育的価値の中に組み込まれ得るものなのである。そこで、環境教育またはエコロジー的教育は土着のあるいは地域独特の、さらには個人独特の自然体験といった価値によって支えられるものとして考えられる。そのためには、イデオロギーとしてのエコロジーに対しての評価に見られるようなエコロジー的価値の特殊視を克服できるような社会的価値を実現し、エコロジー的教育価値の意味を問い直すことをしなければならない。さもなければ環境教育は実効性をもたないものでしかないのである。

自己教育力の探究

教育学 田 所 昌 也

最近では教育界において、「自己教育力を育てる授業」とか、「自己教育力を養う指導」などといった自己教育に関するテーマが、数多く研究されているようである。このテーマが大きくクローズアップされてきた理由は、昭和五十

八年の中央教育審議会・教育内容等小委員会の『審議経過報告』において、自己教育力の強調がなされたからであろう。この『審議経過報告』では、この自己教育力を三つの側面からとらえて、学習の意欲・学習の仕方の習得・生き方の

追求としている。

本論文においては、自己教育力を探求するにあたって、生き方の追求を中心に据えて進めていきたいのである。そして、その理論的根拠を、E. H. エリクソンのアイデンティティ論に求めたのである。アイデンティティ論において、アイデンティティの形成過程を歴史的、社会的、精神的、身体的な自己確認の連続過程とし、それらを成長、発達過程で徐々に統合していくことが、生き方の発見につながるのである。また、その統合力は自己教育力ともなっていくと考えるのである。

したがって、本論ではアイデンティティの形成過程をエリクソンの理論を紹介することで概観し、それに自己教育力の側面から考察を加えるようにした。エリクソンはアイデンティティ論に加えて、人生を八つの段階に分けて考察したライフサイクル論も構想している。これもアイデンティティの形成過程で、発達段階別に考える利点があると思われるので、同時に考察の対象とすることにした。

まず序章では、卒業論文作成時での私の自己教育に関する見解から、本論への問題意識の移り変わりを簡単に追ってみた。

一章は、エリクソンのアイデンティティ論とは、どのような理論なのか、また人間と社会・歴史、身体と心をどのように結びつけるのかを考察した。

二章では、ライフサイクルの中の子ども時代

に、自我アイデンティティの基礎が、どのように形成されるかを考察した。

三章では、各人が青年期における自我アイデンティティの形成を達成する過程を追った。この過程で、それ以前の子ども時代に形成されたものを、主体的、自覚的にとらえかえし、取捨選択することと、新しいことを経験して試行錯誤を重ねる中で、主体的自己変革能力が育っていくことを強調した。

四章は、青年期に確立される自我アイデンティティが、その形成過程で必然的に他者との矛盾や対立を含み込んでしまうことから、この矛盾や対立をいかに乗り越えて共同性を回復するかを探ってみる。矛盾や対立は、裏面では差別や偏見と根深く結びついている。だから、異質なものを差異としてとらえて、葛藤を自ら引き受け、普遍的なアイデンティティをめざして自己超越することを論じた。

五章は、一章から四章までに考察した過程を再考するために、ライフサイクルを図式化した漸成図を用いて説明をおこなった。発達段階を順番に並べただけではなく、エリクソン独自の読み込み方を示した。

最後の六章は、本論で深く踏み込んで考察できなかった点を、今後の課題としてあげておいた。それは、自己教育力という場合の自己概念の問題である。自我 (ego) や自己 (self) と区別される「私」(I) の働きに注目して、この「私」(I) の発達の研究を課題とした。

公教育と子どもの関係をめぐる批判的考察

－「不登校」と「専門家」支配の観点から－

教育学 住 友 剛

本論文は、公教育と子どもの関係を批判的に考察するために、「不登校」の子どもに対する精神医学的な知識・技術などを有する「専門家」による支配という観点から、国家にとっての「不登校」問題のもつ意味を問うものである。

特に、第Ⅱ章において、精神医学の方法論や精神医学者のおかれている社会的文脈について批判的に考察し、三浦つとむの「制度」概念との比較検討を行った。この結果、本論文においては、精神医学的な知識及び技術を有し、「反制度的な子ども」の意志や行動を早期に発見し対応する「専門家」を、筆者は「公教育における<子ども解釈装置>」と名づけ、分析の中心に置いて検討した。

今回は、この公教育における<子ども解釈装置>のとらえた「不登校」の子ども像および「治療・矯正」論と、そのような精神医学理論を必要とする「需要者」としての公教育の側の意図との関係を、4つの時期に分けて考察した。とりわけ、義務教育制度における「長期欠席・不就学」児童生徒対策及び生徒指導の充実強化、「望ましい青少年像」などの変遷を、1960年前後から今日まで概観し、「不登校」論と国家の教育政策の関連を中心的な考察の対象とした。

論文の構成は、「はじめに」で問題意識を述べた後、まず第Ⅰ章で今日までの「不登校」問題に対する教育学研究の問題点を整理した。第Ⅱ章においては、精神医学的な「不登校」研究の成果を、筆者の問題意識に近づけて分析するための方法論を検討した。第Ⅲ章では、1960年代以降の精神医学的な「不登校」論の変遷を時

期区分に従いながら検討し、公教育に対する「不登校」に関係する人々の規模意識の変容を明らかにした。第Ⅳ章では、公教育における<子ども解釈装置>の成立過程とその意図を、1950年代後半からの義務教育における政策的な動向との関係から論じた。そして、最後の第Ⅴ章では、今後の「不登校」問題に関する教育学研究と「市民運動」が、今後問題にするべき事項を論じた。

筆者の検討結果及び主張は第Ⅳ章及び第Ⅴ章で述べているが、ここで要約してみると次のとおりである。

第一、1960年前後の公教育側の「長期欠席・不就学」児童対策に見られるような義務教育の完全実施及び延長への国家意志と、「期待される人間像」答申（1966年）に見られるような資本主義社会の変化に主体的に対応する「望ましい青少年」の形成への国家意志、すなわち「子どもの学校への囲い込み」の意志が、1960年代に「登校拒否」現象が長期欠席児童生徒の中から独自の現象として確認される背景的要因として存在していると考えられる。

第二、1970年代の公教育側の養護学校義務化、校内暴力対策のような生徒指導の充実強化といった政策によって、「子どもの学校への囲い込み」がより一層強化されたと考えられる。精神医学的な「不登校」論においても、子どもや家族を「治療・矯正」の対象とする理論と、先の養護学校義務化問題から芽生えた「専門家」内での学校批判的な理論とが、学会内においても競合している。

第三、1980年代以降今日までの公教育側は、青少年問題審議会及び臨時教育審議会などで示された方針をもとに、「不登校」の子どもを生み出した家族、学校、地域社会の規範意識の変容に、精神医学的な知識とそれを有する「専門家」の配置、養成などを通して積極的に介入しようとしている。一方、子ども・親などを中心とした「市民運動」は、この動きに対抗して、学校批判的な「専門家」とともに公教育側の理論家を批判し、「不登校」の子どもを一律に治療・矯正の対象とはしないという「専門家」の認識を獲得している。

第四、以上のような変遷をふまえ、筆者は、「市民運動」の動きにも一定の注目をしながら、「どの子にも起こりうる」という「不登校」認識にもとづく「適応指導」を行うことに、今日の公教育の本質的問題が隠されていると主張す

る。すなわち、積極的な「適応指導」と「市民運動」の意志への配慮を通して、今日の公教育は「9年の普通教育を受けさせる」義務の履行、すなわち国家意志の再実践を子どもとその親に対して強要していくのである。

第五、以上のように今日の公教育を認識した場合、「自我の発達の遅れた」などと精神的な発達の観点から「専門的」に説明されている「不登校」の子どもに、「国民教育論」的に教育権保障という観点から「適応指導」をとらえると、今日ではそのことを通じて国家による支配が貫徹するという構造が存在している。したがって、「不登校」に関する教育学研究は、義務教育制度、公教育における「専門性」、教育学研究における「子ども認識」、「国民教育論」的な「不登校」論を、今後批判していかなければならない。

光点パターンによる自己知覚

—自己の生態学的アプローチ—

教育学 白 川 雅 之

本研究では、Gibsonの生態学的アプローチに基づいて、自己像をどれほど認識しているかを検討する上で、パッチライト法を用いて、自己と他者を同定する時のメカニズムについて考察した。

これまでパッチライト法を用いて、自己と他者を同定する実験では、からだの主要な関節部に貼付した光点の動きだけで、自己と他者を同定できるということ、また自己の同定率が他者の同定率に比べて高いということだけが注目され、それに関わる要因については全く考察されてこなかった。これまでの研究から、自己と他

者を同定する際に影響を及ぼすと思われる要因として、性差、他者に関する知識、意図、光点の位置が考えられる。そこで本研究では、これらの変数を順次取り扱い、実験を行った。実験1では、お互いが全く知らない場合でも、自己を同定でき、性差は自己の同定に影響を及ぼさないことが示唆された。実験2では、実際におもりの入った箱を持ち上げる条件、からの箱をおもりが入っているように見せかける条件に関係なく、自己も他者も同定でき、自己の同定率は他者の同定率よりも高いことが示唆された。実験3では、手首、肘、肩に光点がある条件

（上半身条件）では、自己と他者を同定でき、足首、膝、腰に光点がある条件（下半身条件）では、自己と他者の同定が不可能であることが示唆され、また上半身条件、下半身条件に関係なく、自己の同定率は他者の同定率よりも高いことが示唆された。

自己の同定率が他者の同定率に比べて高いという結果から、映像の違いを判断するという処理と、その映像にある特定の名前を付けるという処理の関係が、自己同定の場合と他者同定の

場合で異なるのではないかと推測した。本研究では、他者同定の場合、これらの処理が直列関係にあり、自己同定の場合、これらの処理が並列関係にあると考えた。また他者同定に影響を与える要因として、知覚者が他者に抱いている性格観や他者の視覚イメージが考えられ、自己同定に影響を与える要因として、自己の身体像に関するイメージ、実際に行為した時の記憶、筋感覚的な情報が考えられた。

大学生のメンタルヘルスについて

教育学 竹 村 百 代

健康に関する関心が高まっている現代社会において、健康に関する捉え方も身体的側面からだけでなく、心理的側面からのアプローチ法にも注目衆目が集まってきている。さて、それでは、「精神的な健康（心の健康）」とはどういったものなのであろうか。また、「心の健康」を作り上げていくのには、どういったことが重要となってくるのであろうか、ということになる。

「心の健康」に関する統一された見解はないが、7人の著名な心理学者の「健康な人格」に関する研究を比較検討したSchulz, D. (1977)の「精神保健の本質」の基準によると、健康な人格というのは、

- ①自分の生活を意識的にコントロールできること
- ②自分は誰か、自分は何者であるかについて知っていること
- ③現在にしっかり結びつけられていること
- ④新しい目標や経験を目指していること
- ⑤その人らしい独自性を持っていること

とされている。

さらに、メンタルヘルスというのは、生涯を通して追求されるものであるが、その中でも、「人生における第2の誕生期」とか、「危機の時代」と言われ、人生において非常に重要な位置をしめる「青年期」という時期に着目した時、その時期のメンタルヘルスというものは、一体どういうものであるかについて考えることにした。

まず、青年期のメンタルヘルスを考えるにあたり、メンタルヘルスと大きく関わる発達課題（青年期の）についてみると、重要なポイントとなるのが「自己概念の確立」である。

「自分はこういった人間であるのか」といった問いに対して、様々な観点から自分なりに答えを見だし、自己概念を確立することが、青年期の課題を達成するのに大きなウェイトを占めることになる。またこの自己概念の確立は、メンタルヘルスを維持するためにも、その定義からみて、重要な役割を担っている。

また、人間を連続的に、過去・現在・未来と

いう時間的つながりをもった存在としてみた場合、その過去の影響というものはその人の人格を形成する大きな要素であり、現在の精神状態にも多大な影響を与えているといえるであろう。そこで青年期における、その人の早期の経験が、その人の現在（青年期において）が現在のその人の精神状態に様々な形で関係しているといえるだろう。

そこで今回は、青年期、特に大学生のメンタルヘルスについて、「自己概念」、「過去の経験（状況や環境・対人関係）」の観点から、質問紙（KDCL、TSCS、過去の経験に関する質問紙）による調査・研究を行い、その様相を明らかにすることを試みた。

そして、今回の調査から、大学生のメンタルヘルスの状況、それと関連する自己概念の獲得状況、過去の経験の影響度などについて以下の考察をすることができた。

今回の調査では、40%以上もの学生が精神的に不健康な様相を呈しており、精神的に不健康な者は健康な者に比べて、否定的で消極的な自己概念を持っているという結果が出た。しかし、学年を重ねるごとに、精神的に安定していく様子もうかがえた。これは青年が様々な問題を抱えながらも、それを乗り越えていく過程の表れともいえるであろう。また、過去の経験に関す

る調査では、一概に、過去は現在を規定する要因であるというには至らないが、いじめや親の態度などの経験に関して精神的に健康な者とそうでない者の間に有意差がみられたし、自分を援助や理解してくれる人、信頼感や安心感を抱ける人の存在の重要性が示されていた。つまり、メンタルヘルスの維持にはサポート的な人間関係が必要であることがあらわれていた。今回の調査では、過去の人間関係についてしか尋ねていないが、もし精神的に不健康な状態にある学生が、現在もよい対人関係を結べていないとすれば、早急にサポートの手を差し伸べることが必要であろう。

青年期という時期において、学生は様々な問題や課題を抱え、模索しており、その中で精神的に不健康な状態に陥っているものも沢山いる。しかし、不健康な状態に陥りながらも、課題を解決し問題を乗り越えることによって、大きく成長し、次のステップへと進んでいけるのではないだろうか。

その過程の中で、うまく問題が処理できず困っている者への援助のため、不健康な状態が病的なものへと悪化するのを防ぐため、またより高いレベルでの人間形成を目指して、心理的サポートシステムの充実が望まれる。

自信警報 ～万が一、グラッときたら～

教育学 西 坂 公 瑞

自尊心とはなにか。辞書によるとこの言葉には傲慢で尊大なニュアンスがあるが、ここで論じる自信、自尊感情、自尊心とは、ありのままの「私はOKである。」という自分の存在価値を肯定する根本的な感情のことである。

まず、うつ病の認知モデルを、自尊心を理解するために紹介する。学習理論では、うつ病は正の強化子が減少したり、それを得るスキルを持っていなかったりする場合に生じると考える。認知理論では、うつ病は誤知の歪みから生じる

ものとされ、患者たちは、自己や世界、そして将来をネガティブにとらえ、否定的なスキーマを乱用し、社会的相互作用の中から自分にダメージを与えるようなストロークを得る。自己コントロール理論では、自己監視、自己評価、自己強化の各要因の欠如がうつ病を引き起こしている。患者たちは誤った自己監視をし、極端な要求水準で自己評価を低め、自分を罰するような強化を行うのである。学習性無力感モデルは、はじめうつ病は動機づけ、認知と連合、情動の欠損を特徴とする単純なものであるとしていたが、セリクマンは理論を改訂し、原因帰属を中心にすえてうつ病を説明している。

人間には自分および他者の行動の原因を解釈しようとする傾向がある。うつ病者や自尊感情の低い者は、成功経験を、外的、安定的、一般的なものに帰属させ、失敗経験は、内的、不安定的、特殊的なものに帰属させるといふ。自尊感情の高い者と、低い者との違いは、彼らの属性の違いではなくただ帰属スタイルが異なるだけであろうと考えられる。ここでは帰属スタイルを変更させ、自尊感情を高める方法をいくつか挙げている。

自尊感情の低いものは必要以上に高い要求水準を有していることが多いが、これは自分に対する評価基準が確立しておらず、他者からの評価に頼り切ることから生じる。

自己評価の維持を危うくするような経験を人は排除する。自己評価が低くなるとシャイネスが高まり、自己評価が高くなるとシャイネスは低くなる。自分に弱点があるから自己評価が低くなるのではなく、自己評価が低いから小さな弱点にとられるのである。自己評価は幼少時に決定され、なかなか変えにくいものである。

正しく自己評価ができるようになれば、それを受容できるようにする。自己をしっかりと受容することができて初めて他者を受容することができる。自己受容とは自分の属性すべてを好きになれということではない。自分の嫌いな部分も否定や無視をせず、自分のものであるということに認めるということである。

自己受容ができるようになれば、次は自己主張である。親から善悪の判断基準を示されて育てられた人には自己主張をすることは困難であるが、イエスと言うべきところはイエスと言うようにすることが自己主張の第一歩である。

老年者の生甲斐感スケールの開発 及び

生甲斐感に影響する諸要因の研究

教育学 近 藤 勉

老年者の生甲斐感スケールの開発及び生甲斐感に影響する諸要因の研究

〔Ⅰ〕 老年者の生甲斐感スケールの開発

1. 老年心理学に於ける真の生甲斐感スケールの開発が必要

2. 生甲斐感の操作的定義が必要
3. 生甲斐感の既往の定義とそれに対する論議

神谷や返田を初めとする多くの研究者からは、生存充実感であり、意味や価値を実現する時に体験されるものと述べ

られているが、その価値は社会的価値に合致する事を前提としている。しかしこれは間違いであり、生甲斐感は主観である以上、社会的価値に合致しないものであってもよい。又生甲斐感は幸福感とよく混同されている。その為生甲斐感とはどのようなものかを調査する。

4. 生甲斐感と云う概念の調査

(方法)

質問紙—説明概念として意欲、使命感、役割感、目的感、期待され感、責任感、価値意識、幸福感、満足感に集約し、これらの概念を羅列し生甲斐感とはどのようなものかを尋ねた。

調査対象—日本心理学会に所属する60歳以上の会員に送付返答を求めた。

(結果)

平均得点から生甲斐感に近いと見なされた順は意欲、役割感、使命感、目的感、期待され感、価値意識、幸福感、満足感となった。

5. 老年者の生甲斐感とは

生きる張り合いであり、意欲と云う能動性、積極性を持ち、生きる目的や価値が現在及び未来をも含めて心の中に充ちる状態である。

6. 生甲斐感スケールについての既往の研究

欧米には生甲斐感に該当する言葉がなく、適応感や幸福感、満足感を計る尺度しかない。そしてそれを輸入したものや改良を計ったもの、さらにP. I. L. や、Q. O. L. テスト等を生甲斐感スケールだと称したものしかない。その為調査結果に基づいた本物のスケールを作らねばならない。

7. 生甲斐感尺度の作成

従来の尺度の中から適切な項目は引用

し、残りの21項目は創案し、合計24項目で作成した。項目数の配分は説明概念の平均得点分布による事とした。(充実感と云う説明概念を補足)

8. 上記の生甲斐感スケールについての疑問

生甲斐感と云うものは生存充実感であると述べた如く、膨らみである。しかし上記の尺度では構成要素の多寡は計れても、心の中の膨らみや密度は計れない。それならば自ら顧みて生甲斐感の充満度を推測して数値の上で表すのがもっとも適切である。それをセルフ・アンカリングスケールと称する。

9. 生甲斐感のセルフ・アンカリングスケール

あなたは生甲斐を感じていますか、どの程度感じていますか、を0～10段階で尋ねる。ここで便宜上24項目のスケールをA尺度とし、セルフ・アンカリングスケールをB尺度とする。

10. 研究の目的

A・B両尺度に回答を求め、A尺度得点総和とB尺度得点との相関をとってみる。有意な正の相関がとれるならば、B尺度で計ろうとするものは、A尺度でも計り得る事を意味する。即ち妥当性が生じる。次に試みにA尺度の標準化を計ってみる。

又相関がとれない場合はB尺度しか生甲斐感尺度になり得ない事を示す。そしてA尺度の標準化が計れるならば、A尺度とB尺度のどちらを生甲斐感尺度とするかを決定し、生甲斐感に影響する諸要因との関係を性別で検討する。

11. 方法

質問紙………基本的背景属性を14項目にわたって尋ね、最後にA・B両尺度の回答を求める。

調査対象……北摂地域の老人福祉センターで60歳以上の老年者416名から回答を得た。

12. 結果と考察

- 1) B尺度を外部基準とみなした場合の妥当性の検証、0.586 と云う正の有意な相関が見られた。
- 2) 予備調査を基にした概念的妥当性の検証、0.811と云う正の相関が得られた。
- 3) 信頼性の検証
再検査法では、0.914、折半法では0.854、 α 係数は0.91となり非常に高い数値となった。
- 4) 項目分析
項目の取捨選択であるが、吟味した結果は以下の通りである。

項目分析	削除修正検討項目
B尺度との妥当性係数を高める試み	12
総点と項目得点との相関	特になし
得点率(項目困難度)	4, 7, 17, 20
性差	特になし
項目間相関	特になし
因子分析(主因子解)	4, 7, 17, 20
因子分析(バリマックス法)	7, 18

上記の項目の中から敢て改良項目をみつける事も不可能ではなく標準化の為には必要であろう。しかし改良には再調査が必要であり以下に述べる如く、改良なしでも十分な信頼性と妥当性の値は得られているので本論ではA尺度の削除は加えない事とする。

5) A尺度の検証結果

上記の検証の結果、A尺度は表面的妥当性、内容的妥当性、概念的妥当性、基準関連妥当性について高い妥当性が

あり、信頼性については再検査法と折半法に於て高い信頼性と妥当性のある尺度であると云える。

13. 結論

A尺度の方を生甲斐感スケールとして決定する。

[Ⅱ] 生甲斐感に影響する諸要因との関係

1. 年齢

負の相関があった。即ち高齢になる程生甲斐感が下る。特に女性に顕著であった。

2. 性差

性別による生甲斐感との違いはなかった。

3. 仕事(就労)の有無

男女共仕事を持つ方が生甲斐感が高い。

4. 最終学歴

男女共おおむね高学歴の方が生甲斐感が高かった。これは向上心を生来的に持つ者は勿論、そうでない者も学校教育を受け知識を身につけた事によって視野が広まり、生甲斐対象を見つけやすくなり、老後意欲に充ちた生活を送る様になったのではないと思われる。

5. 同居家族と配偶者の有無

男女共、夫婦2人で暮らすのが生甲斐感上位であり、以下3人以上の同居、一人暮らしと続く。夫婦以外の同居人が入る事で生甲斐感が下るのは配偶者が同居人と親密になり疎外感が生じる為か、役割感や責任感が相対的に減る為かも知れない。配偶者の有無はどちらも相関があったが女性は男性程一人になっても生甲斐感は下らない。

6. 居住歴

男女共関係なし。

7. 住いの満足感

男性には相関があり、女性には無かつ

- た。
8. 健康感
男女共影響しない。
 9. 経済的満足感
住いの満足感と同様、男性には相関があるが女性には無かった。
 10. 宗教心
信心心と高い相関のあったのは男性であり、女性はそうではなかった。
 11. 気楽に話の出来る友人・知人の存在
男女共こうした友人のいる事と生甲斐感とは相関があった。
 12. 活動との関係
今回の活動を計る為の設問では顕著な傾向は表れなかった。
 13. 生甲斐対象
男女共生甲斐対象の数の多い者程生甲斐感が高いと分った。
 14. 性格との関係
男女共社会的外向性と有意な正の相関があった。
 15. 考察のまとめ
以上の結果から男女とも共通しているのは、就労と学歴、配偶者との同居、友人、生甲斐対象数、社会的外向性であった。違いとしては男性に住まいと経済的満足感、それに信心心が影響している事

が分った。それに対して女性は少々の病
気や住宅の不満や経済的欠乏には全く影
響されないだけの逞しさが有り、それよ
りも友人や趣味等の活動で生甲斐を見出
している姿が読み取れる様である。

16. 生甲斐感とうつ病

生甲斐感の高い人は生きる意欲に溢れ
る人であり、自殺に繋がる可能性のある
うつ病とは無縁と考えられるが果たして
そうであろうか。

61名のサンプリングではあるがK. D. C.
L. (うつ病チェックリスト) を使って調
査してみた。結果はうつ病と判定される
者が10名いたがその内の男女2名づつは
生甲斐感高得点であった。共通した特徴
としては、役割感得点が一様に低かった。
性格は外向性しか調べていなかった為、
その原因の十分な考察が出来なかったが
人間の複雑な2面性を感じさせられる。

17. 結び

今回生甲斐感尺度を開発したが、サン
プルがセンター老人であった為、標準化
がそれに限定される事、その為一般老年
者を対象とした尺度にする必要がある。
又生甲斐感に影響する諸要因の可能性は
探求出来たが影響する度合いは果たせな
かった。共に今後の課題である。

自己愛パーソナリティに関する一研究

教育学 谷 口 正 弘

今回の大学生を対象にした調査では、因子分
析の結果第Ⅰ因子に「自己有能感」第Ⅱ因子に
「孤独感」第Ⅲ因子に「野心」第Ⅳ因子に「賞
賛希求」の四つの因子を得ることができた。

K D C Lによって「臨床群」「正常群」に判
別された各群での各因子の平均得点の差を見ら
ると、「自己有能感」の因子では正常群で有意に
高いことがわかった。これ以外の全ての因子で

は「臨床群」の方が有意に高いという結果が出たが、とりわけ「孤独感」と「賞賛希求」の因子でこの傾向がはっきりと表れた。

また各因子の得点によって「高得点群」「低得点群」に分け、各群で「正常群」と「臨床群」の割合に差がみられるかどうかを調べたところ、「孤独感」の因子で低得点群であると「正常群」の割合が最も高く、次いで同因子で高得点群であると「臨床群」の割合が高くなることが分かった。さらには「孤独感」「賞賛希求」両因子高得点群では「臨床群」の割合が高く、以下順に「賞賛希求」の因子高得点群では「臨床群」が高く、「孤独感」「賞賛希求」両因子低得点群では「正常群」の割合が高いことが分かった。

つまり、自己愛の肥大に由来すると思われる孤独感の高さと、常に周りからの賞賛を得たいという気持ちはこれがあまりにも高すぎる場合不適応を引き起こすことと強い関係があるということになる。

これが自己愛の高さゆえに不適応を引き起こしたのか不適応状態にあることが自己愛に満足を防げ、過剰に自己愛的になっているのかを結論付けることはできない。しかしなんらかの不適応状態にある人にとって健全に自己愛を満たし、対象と自己愛的にでなく関われるようになることが重要な課題としてあるとは言えるのではないだろうか。

孤独感の両義性に関する研究

教育学 林 賢 一

孤独という言葉の響きにわれわれはある魅了を覚えることがある。それはどこかしら寂しげな心情に人を想う心が隠されているからかもしれない。しかし、それはあくまで人との関係に疲れた人間がひとり物思いに耽るという映画のシーンに共感を覚えるといったたぐいの単純な憧れに過ぎない。

現実に孤独になる、すなわち、孤独感を体験するということは、物理的に人から遠ざかることだけを意味するのではなく、悲しみ、絶望、不安などの否定的な感情を味わうことを意味するのである。したがって、孤独感を好んで抱きたいという人間などいるはずもないということになる。

社会通念として孤独感は、生きていく上でも人との関係を保つ上でも不利になり、弱い者の証であるような捉えられ方がされてきたといえ

るのである。

では、孤独という第三者の目から見てひとりの状態は生きていく上で肯定的であり、孤独感という主観的体験は否定的であるということになるのだろうか。

答は“ノー”である。なぜなら、人から離れてひとり（孤独）になり神経をすり減らすことから救われたとしても、根本的な問題は解決され得ないからである。つまりそれは単なるストレス緩衝行動に過ぎないからである。

しかし孤独感という主観的体験には、落合がその構造を明らかにしたように、自己の個性の自覚が含まれる。年齢により、あるいはライフ・イベントの違いにより、この対自的次元の孤独感が出現する時期は人により異なるとはいえ、それは自己の自律性をもたらすといえる。その結果、人との関係の深浅にのみ孤独感の有

無を見出し翻弄される場合とは違って、たとえ否定的な感情に苛まれようとそのような感情を抱かしめる直面した問題を自分の問題として考える機会を得るという、生きる上での幸運に巡り会うことができるのである。それは孤独感を否定的にのみ捉える社会通念から、自分を振り返り自分と対話するという作業によって生きる意味を見出すことを可能にするという肯定的な側面が孤独感にあることを気づかしてくれるのである。

ここに孤独感が両義的な性質を持つものとして、そして孤独ではなく孤独感が肯定的な意味を持っているものとして捉えられる可能性を主張するのである。そしてその肯定面は、“生きる意味を考える機会を与えてくれる意識状態”という意味が孤独感に内包されていることに見出されるのである。

以上のような視点から本論文は4つの章にわたって考察されている。第Ⅰ章では、社会通念や孤独感研究の孤独感の捉えられ方、孤独と孤独感の違い、言語上の問題を取り上げることによって広く孤独感を考察している。第Ⅱ章では、孤独感の出現と経験を人生の各発達段階別に考察し、後半では H. S. Sullivan の孤独論を軸に孤独感の両義性の可能性を追求している。第Ⅲ章では、従来の孤独感研究が孤独感を否定的経

験としてのみ捉えていたことの反省の意味を含めて、調査研究により孤独感の両義性の可能性を探っている。そして第Ⅳ章は、強制収容所の体験、精神医学における急性悲哀の研究を取り上げつつ孤独感の両義性の可能性と孤独感の肯定面の強調を行なっている。そしてさらに現代社会が抱える問題と孤独感の関連を災害に見出し、孤独感が抱かれにくくなっている現状を社会通念での孤独感の捉え方と重ねながら考察している。

本論文は孤独感の両義性の実証的研究ではない。つまり、数字を駆使したり、事例の考察からその確証性を訴えようとはしなかった。なぜなら、本論文が意図したところは、孤独感という広範な感情を一点に絞り込むことにより、そのわれわれの人生に対する意味するところを捨象したくなかったからである。そのため、第Ⅰ章、第Ⅱ章においてあえて可能なかぎり詳細に孤独感を考察した次第であった。

本論文の意義は、今後の孤独感に関する、あるいは孤独感の両義性に関する実証的研究の遂行を円滑にするところに見出されるであろう。

孤独感を抱くことが如何に大切なことであるのか、現代という個人の危機の時代に問われた問題が反照しているといえる。

疎外（感）を軸として

ー心理学とマルクス主義を巡る議論ー

教育学 藤 井 弘

本論稿の目的は、マルクス主義と心理学の接点として疎外の問題をとらえ、諸論点について整理し、今日の社会主義を巡る議論と局面の困難さの中であって、疎外論はいかなる位置にあ

るのかについてのアプローチを試みることにあ

る。ここでは先ず、疎外論についての系譜を概観した。そして次、疎外の問題をめぐるマルク

ス主義と心理学との間での諸論点について以下の内容に即して整理を行なった。すなわち、

①社会心理学の疎外概念とマルクス主義の疎外概念との分岐点

②疎外をめぐる社会学とマルクス主義における議論、及びこれに付随しての政治心理学における同様の議論について

③人格心理学にかかわる側面での疎外に関する議論

④マルクス以降の、マルクス主義そのものの分野における議論

⑤官僚主義、官僚制に関わる疎外をめぐる議論

⑥社会主義像、社会主義の理念をめぐる疎外にかかわる議論

以上の各項目内容である。

上記内容の議論の整理を通じて、特にマルクス主義と心理学の間においては、疎外概念について『歴史性』の概念が重要なキー概念であ

り、その取り扱い方をめぐって議論があり、今日なお課題であることを確認した。また、マルクス主義疎外論にあつては、マルクスの「総体性」概念が議論の主要な一角を占めていることを確認した。

提出にあたつての問題意識は、

- 1 マルクス主義と心理学との結合は果たして可能であるのか、あるいはその接点となりうるのはいかなるものであるのか。
- 2 上記とも絡み、いわゆる上部構造と下部構造との結合はどのように果たされうるのか、イデオロギーの人間の諸要素への影響は如何なるものであるのか。
- 3 本来最も人間的であろうとしたマルクス主義が非人間的なものの様相を帯びざるをえなかったのは何故か。

以上の内容からなる。

大学生における精神的健康と

生きがいに関する研究

教育学 武 本 英 児

大学生の精神的健康に関する調査において高い割合で不健康とされる学生が存在することが報告されている。福西(1987)は、大学生の48.0%、渡辺(1992)は50.7%が不健康と報告している。この現象の解釈には青年期の発達課題であるアイデンティティ確立の際に生じる一過性うつ状態が考えられている。

しかし、青年期を終えた成人期の人々にも高い割合で不健康とされる人がいることが報告されている。福西(1987)の、三十代の43.6%四十

代31.7%が不健康といった報告がある。そのため、大学生の精神的不健康は青年期の一過性うつ状態とは限らない可能性がある。そのため、本研究では不健康とされる学生の理解を深めるためにアイデンティティ論とは違った側面から研究を行った。

Frankl, V. E. (中村訳1982)は、現代は、思想・伝統に意味を見出すことは難しい時代であると述べている。現代は、昔のような画一的な価値観で生き方を選択しやすかった時代に比べ、

価値観が多様で何が正しく価値があるとは一概に言えない時代である。 فرانクルは、やがて、人は自分が実際に何をしたいかと望んでいることさえわからなくなってしまい、他人が自分に要求する道に引っ張っていかれると述べている。

フランクルは人間の動機づけの基本となるものは「意味への意志」であると考えた。人は自分の人生に独自の感覚を与える意味と目的を見出せない時、実存的空虚を経験する。この空白状態は、主として退屈、倦怠として現れ、それが持続すると「実存的欲求不満」となる。これは意味、目的が見出せないことに対する情緒的反応であるが、神経症的な人の場合は、精神因性神経症となる。実存的空虚は、神経症でも異常でもなく、人間のひとつの状態でありフランクルは現代の機械化時代の産物であると述べている（佐藤1975）。また、Paul Tournier は人間が健康的な生活を送るには、価値や質の経験の中でしか味わえない真の生きがいの探求こそが重要であると述べている（吉田1993）。神谷（1980）も「生きがいについて」という本の中でほぼ同様の見解を述べている。このため本研究では精神的に不健康にある学生は実存的空虚・欲求不満にあるのではないかと仮説を立て、それを中心に研究を進めた。また、実存的空虚と精神的に不健康の理解を深めるために、自尊心、内的・外的統制型、孤独感、時間的信念についても調査検討した。

調査対象は大学生224名で用いた質問用紙は、K D C L、P I Lテスト、自尊感情尺度、Locus of Control尺度、孤独感尺度（LSO）、時間的信念尺度である。これらによるデータを分析し次のことが示唆された。

1、精神的に不健康にある学生は全体の約40%であった。性による違いは見られない。

2、精神的に不健康にある人は、まず生きる意味を見出している度合いが低いことが考えられる。いわゆるフランクルの言う実存的空虚、

実存的欲求不満におかれ、抑うつ状態にあることが考えられるのである。そして、それゆえに自尊心が低くなり、また、共感性が低く、個性が高いといった孤独感の高い状態にある。そして、統制型は外的統制の傾向にあり、自分の人生は有力他者や運などによって決まってしまうという信念のもとに生き、困難や苦労に自力では対処できない。しかし、精神的健康とされる人よりは今がよければ楽しければといった刹那主義的な時間的信念は弱く、精神的健康には刹那主義的な態度で生きることが必要であると考えられる。また、将来のより高い目標のために満足を遅延し努力しようという態度である展望主義的時間的信念は健康とされる人と違いはなかった。

そして不健康な学生、つまり、生きる意味を見出すことができない実存的空虚、実存的欲求不満にある学生が多数見られる原因は、能率性と経済性に重きを置く現代人がつくった社会の影響によるとして考察した。

我々は能率性と経済性に重きを置き過ぎたため、自分自身による能動的な試行錯誤によって自分が獲得した成果を自らが享受するといった自己のあり方は失われ、その結果、消費的で、情報優先主義的で変化に順応することに急な、ソフトで主体性のない、徹底的に順応する生き方を強いられるようになったのである（小此木1993）。つまり結果として、消費者として支配されるようになり、ものやサービスを持つこと、消費することが喜びであるというように、理性よりも感性的、展望よりも刹那的な生き方を知らず知らずのうちに強いられている。このような状況の中で、生きる意味を見出せず、刹那的生き方もできない学生が実存的空虚、欲求不満、あるいは精神因性神経症に陥っていると考えられる。

最後に「精神的健康」という概念と研究方法について再検討の必要性を論じた。